水を縫う (1)

（手芸が好きな「僕（松岡清澄）」は、高校に入学後、後ろの席の宮多雄大から声をかけられるようになりました。「僕」は中学生のころ仲の良い友だちがおらず、祖母にそのことを心配されていました。）

昼休みの教室には、机をくっつけたいくつもの島ができていた。大陸と呼びたいような大所帯もある。中学の給食の時間とは違う。めいめい仲の良い相手と昼食をともにすることができる。

入学式から半月以上過ぎた。僕は教卓の近くの、机みっつ分の島にいる。宮多を中心とする、五人組のグループだ。

【宮多たちは、にゃんこなんとかという僕の知らないスマホゲームの話で盛り上がっている。猫のキャラクターがたくさん出てきて戦うのだという。ゲームをする習慣がないから、意味がよくわからない。さっきからぜんぜん会話に入れない。課金とかログインボーナスという単語が飛び交っている。もう、相槌すら打てなくなってきた。】

祖母の顔を思い出して、①懸命に話についていこうとした。だって友だちがいないのは、よくないことなのだ。家族に心配されるようなことなのだから。

「なあ、松岡くんは」

宮多の話す声が、途中で聞こえなくなった。ふいに※高杉くるみが視界に入ったから。

世界地図なら、砂粒ほどのサイズで描かれる②孤島。そこに彼女はいた。箸でつまんだたまごやきを口に運んでいる。唇の両端がきゅっと持ち上がった。虚勢を張るわけでもなく、おどおどするでもなく、たまごやきを味わっている。その顔を見た瞬間「ごめん」と口走っていた。

「え」

「ごめん。俺、見たい本あるから席に戻るわ」

③ぽかんと口を開ける宮多たちに、背を向ける。

図書室で借りた、世界各国の民族衣装に施された刺繍を集めた本を開く。宮多たちがこの本に興味を示すとは到底思えない。わかってもらえるわけがない。ほんとうは『明治の刺繍絵画名品集』というぶあつい図録がよかった。残念ながらそちらは貸出禁止になっていたのだ。どのように糸を重ねてあるか、食い入るように眺める。ここはこうなって、こうなってて。勝手に指が動く。

（寺地はるな『水を縫う』集英社　による）

※高杉くるみ…「僕」と小学校、中学校が一緒だった生徒で、変わっているとみなされていた彼女のことを、「僕」はかっこいいと思っていた。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 【 】の箇所(かしょ)の表現について、正しく述べたものを選びなさい。

ア 「僕」の視点から、話の意味がよくわからず、グループの会話に入れない思いを描(えが)いている。

イ 五人のそれぞれの視点から、ゲームの話がだんだん盛り上がっていく状況(じょうきょう)を描いている。

ウ 第三者の視点から、グループの五人の思いがすれ違っていく様子を客観的に描いている。

〔 〕

(2) ――線①「懸命に話についていこうとした」のはなぜか。最も適当なものを選びなさい。

ア せっかく友だちになることができた同級生が、どんなゲームに興味を持っているのか知りたいと思ったから。

イ たとえ意味がわからなかったとしても、友だちなのだからほどほどに話を合わせてやり過ごそうと思ったから。

ウ 友だちがいないのは、家族に心配されるようなよくないことなので、話についていくべきだと思ったから。

〔 〕

(3) ――線②「孤島」は何を表しているか。適当なものを選びなさい。

ア どの机ともつくことなく、ただ一つ置かれている机。

イ 昼食のなかで、とりわけ楽しみにしているたまごやき。

ウ 一人で不安そうに過ごしている高杉くるみの姿。

〔 〕

(4) ――線③「ぽかんと口を開ける」とあるが、この様子を表す言葉として適当なものを選びなさい。

ア あっけにとられる　イ 途方(とほう)に暮れる

ウ お茶を濁(にご)す　エ 気をもむ

〔 〕